

「あああ…♡♡ん”ッ♡♡♡いや…っこれ…やめろ” …お……ッ、♡」

ぐりん、ぐりんッ、と弱い場所を立て続けに穿^{ほじ}られて、それに合わせてなぜか少年の腰まで男に向かってグラインドしてしまう。

男を見上げ、キッと睨みつけている両目から、たえず快感の涙がぼろぼろとこぼれた。

男は少年の腰をがっちり固定しなおし、動けないようにしてから、

「うん～？これが好きなのお？」

「ア”、♡あん！♡♡♡」

例の箇所を思いきり擦り上げてきた。

硬く張り出した、傘のような雁首の端が、やわひだを削^{けず}るように通過した跡から、鋭い快感が体内に走りぬける。

「おちんぼ、また硬くなってるねえ～？」

「可愛い敏感おちんぼだねえ～～？」

両サイドにいる男たちはそう言って、にわかには芯を持ち始めた少年のそこを見

下ろしてくる。が、色づいた幼茎には触れようともせず、

「ああ…ッ♡♡」

上下に喘ぐ少年の上半身へと、ふたたび手を伸ばしてきた。

一人の男は牡丹のように色づいた両乳首に、もう一人の男は、頭上で手を縛られさらけ出しになっている腋下に指を這わせてくる。

「お薬追加しましょうねえ～」

「ひいい…ッ♡♡」

乳首に、一人目の男が挿入してきたときに使ったような、トロトロとした蜜をかけられ、

「ああ…♡ひ…う……っ、♡♡」

片方の脇のくぼみにも、同じ液体を指で塗りつけられた。

「さあ、女の子になろうねえ～～？」

「ひあ…っ♡♡あああ……っ♡♡ん…っ♡ああ…っ…♡♡♡だめえ……っ！」

世にも奇妙な責め立てがはじまった。

孔のなかを、波打つような、奥をほじくり返すような腰使いでぬっぽぬっぽと責められながら、両胸を乳首まわりの胸房ごとヌルヌルと蜜をまとった手のひらでこねられはじめ、そして脇には何か熱いものを押し当てられる。

「ああ…♡い…っいやあ…っ！！」

首をかたむけて脇のほうを見ると、そこには黒い^{くさむら}叢と、そこから突き出した赤黒い^{みき}幹があった。

その熱い幹の先端で、ぬるん、と脇のくぼみをなぞられ、全身がざわりと栗立つ。

「いやあああああ…っ！」

こんなところにまでこんなものを突きつけられる屈辱と気持ち悪さに、腹底が沸騰するような怒りを感じた。

しかし――

「あああ…っ♡♡んああ…っ♡あああ……っ！♡♡♡」

孔奥の好い場所をこそげるように凶太い幹に掘り返され、両胸の広い範囲を手のひらでこねられる刺激に、甘やかな快感が増していく。

ささくれだった神経を強制的に丸く優しいものにされていくような、脳を溶かされていくような、奇妙な感覚に包まれる。

「は…あ…っ♡ああ…っ♡ん…ん……っああ…っ♡♡だめえ…っ…、♡」

あらが
抗いがたい快樂に、躰の内を狂わされていく。

自分の躰が別の何かに作り変えられていくような怖さは消えていないのに——。

じゅっぽじゅっぽと下品に穿られる肉洞も、まるでそこに膨らんだ乳房があるかのように手のひらでこねられる両胸も、熱く硬い雄茎をヌルヌル擦りつけられる腋下も——どこも気持ちよくて仕方ない。

「ああ…♡んんう……っ♡♡♡あああ……っ♡♡」

快樂に支配され、熱に浮かされたように喘がされ続ける。

いたるところから与えられる刺激のどれに身構えたらよいのかもわからぬうち、少年の躰はあっというまにまた高みへ追い詰められていた。

「あ…っ♡ああ…っ♡♡あああああッ！！♡♡♡♡♡」

びくんッ！と腰を男に向かって突き出しながら、腹底から突き上げる衝動のまま、竿から白蜜を散らす。拍子に奥深くうずま^{ひょうし}っている雄茎をきゅううッと締めつけて、内壁から燃えるような快感がほとばしった。背筋を駆けのぼった電撃が、後頭部でばちばちとショートして、少年はひきつけでも起こしたように痙攣した。

名残惜しげにひくつく少年の孔を置き去りに、男がずるりと抜け去ったかと思うと、

「ああ……ッ！♡♡♡、」

激しく上下する少年の薄い腹上に、そしてひくつく腋^{えきか}下にも、男たちの火傷^{やけど}しそうに熱い精が注がれた。熱さにおののいた腹を大きく喘がせて、しとどに溢れる白濁を受け止める。

そうされながら、なぜか物足りなさを感じるのはなぜだろう——。本当はこれらの精を孔奥に欲しかったのにとでもいうように、とろけた内壁が切なげにうごめいている。

(そ……そんなはずないけど)

三人もの男たちに襲われている状況だというのに、自分は一体何を考えているのだろう。

「前、触^{さわ}ってないのにイっちゃったねえ～～？」

「まだ二回目なのにねえ〜。えっちな躰だねえ〜〜？」

「もう、ほぼほぼ女の子だねえ？」

どく、どく、どく……と耳に聞こえる激しい余韻の鼓動を少年がやりすごしているうち、あっという間に男たちはまた、各々の位置を交代した。

「じゃあ、いよいよ完全な女の子に調教してあげるねえ〜」

また新しい男が、少年の脚の間に陣取ったらしい。

彼は暗がりの中何かを取り出すと、何やらうつむきがちに、少年の幼茎に手をかけた。

「え…あ……っ！？なに……っ」

カチャカチャという不吉な金属音に目をこらすと、男は少年の竿の根元を、その下に控える玉菊ごと、細く黒いベルトのようなものでしばっている。それにはやはり本物のベルトと同じような、長さの調節できる金属のバックルがついていて、

「んう…っ！、♡」

痛くまではないがちょうどキツイと感じる短さに調整され、金具を閉じられてしまった。

「今度は前から出さずにイこうねえ～～」

「ひッ……」

男の意図に気づいて身もだえしようとする腰をとらえられ、強制的に凶太い^{みき}幹でこじ開けられる。

「いやあああ……ッ！！」

少年の絶叫に構わず、^う熱れきった肉壺にずぶずぶとそれは押し入ってくる。

目の前の男はどうやら、少年に射精を禁じたまま孔を責め立てるつもりらしい。

後孔だけで絶頂できるほどの快感を教え込まされた今、そんなことをされれば、

自分の躰は一体どうなってしまうのだろう？

「お…っおねが……やめて……っ、」

胸に浮かんだ恐ろしい疑問に、男たちへの怒りなど消えうせて、少年はまた、人形のような顔からはらはらと涙を流しながら懇願した。

「かわいそうにねえ」

「もうやめてあげようか」

「けど、まだ腰こんなに動いてるよ」

サイドにいた男が少年の、いまだグラインドし続ける腰を見下ろしながら言い、

「そうだね。じゃあ、手術開始してだいじょうぶだね」

目の前の男はさらに腰を進めてくる。

「ああ……♡だめ……♡だめえ……っ！」

もう半ばほどまでうずまっている男の、どくんどくんという脈動が恐ろしくてならない。しかし少年の細腰は男たちの指摘通り、まるでゆっくり挿入^{はい}ってくる雄茎を急^せかすように、淫らな前後を繰り返している。

「ああ……♡はいつてきちや、だめえ……っ……！」

二度も続けて絶頂させられたせいか、軀に力が入らない。